



● BONSAI 文化の発信者  
 ～さいたま市が誇る伝統文化を CIR と共に世界へ～  
 —— さいたま市スポーツ文化局文化部大宮盆栽美術館

## はじめに

さいたま市は、埼玉県南東部に位置する県庁所在地で、古くは中山道の宿場町として発達してきた歴史を持ち、現在は東北・上越など新幹線6路線をはじめ、JR各線や私鉄線が結節する東日本の交通の要衝となっています。

## 大宮盆栽美術館の設置と大宮盆栽村

大宮盆栽美術館は、世界に名高い「大宮盆栽村」に近接し、さいたま市の伝統産業にも指定されている盆栽の文化をひろく内外に発信することを目的に、2010年3月28日、世界初の公立の盆栽美術館（さいたま市立）として開館しました。

大宮盆栽村は、さいたま市北区盆栽町に位置し、行政区に「盆栽」の付く日本でも唯一の場所です。1923年の関東大震災を契機に、大きな被害を受けた盆栽業者が、東京から離れ、盆栽育成に適した土壌を求めてこの地へ移り住みました。1925年には、彼らの自治共同体として大宮盆栽村が生まれ、最盛期の1935年頃には約30の盆栽園がありました。



さいたま市大宮盆栽美術館ギャラリー

## BONSAI の世界的人気と CIR の任用

盆栽は、BONSAI という言葉が世界共通語となっており、日本が世界に誇る文化として、多くの人々に親しまれているものとなっています。当美術館でも、海外からの来館者は多く、2023年度は、106の国・地域から8,721人の方（全来館者5万6,283人）が来館されています。また、2019年8月に米国立盆栽・盆景園、2023年11月にオーストラリア首都特別地域政府立キャンベラ樹木園と姉妹館提携を結び、海外の盆栽関連機関との連携も図っています。このような状況の中で、当館では、SNSを中心とした、英語での国内外盆栽愛好家などへの美術館PR活動や海外盆栽関連施設との交流促進などを行うため、2021年11月よりイギリス出身のタートン・ハリー CIR（国際交流員）を任用しています。



タートン・ハリー CIR

## 大宮盆栽美術館での CIR の活動

当美術館の CIR は、翻訳、通訳、英語ガイドをはじめ、SNSを通じた海外向けの広報やTV・雑誌の取材対応など、多くの活動を行っています。

タートン CIR の重要な業務の1つは、翻訳業務です。週変わりの盆栽や盆栽関連の展示解説の英訳、海外からのメールや収藏品解説文、SNSやホームページ投稿の文

草などさまざまなものを翻訳しています。盆栽には専門用語が多いため、必要に応じて学芸員や盆栽技師に説明を求め、外国人に上手く伝える表現方法を模索しながら、翻訳業務に日々奮闘しています。また、外国人向けの盆栽講座において、解説の通訳なども行っています。



美術館公式 SNS やホームページの原稿作成作業を行うタートン CIR



外国人向け盆栽講座の通訳

## 世界中から訪れる人のための英語ガイド

当美術館に訪れる多くの外国人のために、CIR による英語ガイド（インターナショナル・ギャラリー・ガイド）を週 4 回程度実施しています。本ガイドでは、盆栽の鑑賞の仕方や歴史、展示内容について外国人に説明しています。また、海外の政治家や盆栽関連の関係者などの視察の際に、館内同行および通訳し、美術館の概要や盆栽の魅力を伝えています。

## 海外盆栽関連機関との交流の担い手

2023 年 11 月 1 日オーストラリア首都特別地域政府立キャンベラ樹木園と姉妹館提携を結ぶにあたり、タートン CIR が大いに貢献しました。当美術館とキャンベラ樹木園の調整役として、関係書類の翻訳や打合せの通訳のほか、姉妹館提携宣言書の調印式においても、司会進



盆栽展示について英語解説している様子



業務に必要な盆栽に関する知識を当館盆栽技師に確認している様子

行をはじめ、オーストラリア大使やさいたま市長のスピーチにて通訳を行うなど、姉妹館提携が円滑に実現するよう尽力しました。

また、既に姉妹館提携を行っていた米国立盆栽・盆景園との交流事業についても、米国からの学芸員を当美術館にて受け入れるにあたり、日時や交流内容の調整などの翻訳・通訳はもちろんのこと、業務時間中、派遣された学芸員に同行し、美術館内での交流事業や大宮盆栽村にある盆栽園などの視察において通訳業務を行い、事業を円滑に行うことができました。

## 盆栽文化の普及—世界との懸け橋に

2025 年には、大宮盆栽村が開村 100 周年を迎え、より多くの方が美術館および盆栽村を訪れる見込みです。その中で、さいたま市が誇る伝統文化である「盆栽」、世界に通ずる「BONSAI」について、国内外問わず、その魅力をより多くの方に感じていただき、盆栽ファンになっていただけるよう、CIR と共に挑戦し続けていきたいと思っています。当美術館 CIR の活動が、盆栽文化のさらなる普及につながることを期待しています。